



第7回 日本構造医学会 名古屋学術大会特集

Japan Society of Structural Biomedical Science

2002年11月16日 名古屋国際会議場

日本構造医学会の第7回名古屋学術大会（加藤彰一大会実行委員長）が、11月16日、名古屋国際会議場レセプションホールにおいて開催され、学会員総数493人（法人会員含む）中、全国から236人が参加した。

大会では、吉田勸持会長による基調講演『一般構造論——構造医学のめざすもの』のほか、住岡輝明氏（水前寺診療所所長）による『膜の不思議』、西村和雄氏（京都大学経済研究所教授）による『本当の「生きる力」を与える教育は何なのか』の2題の教育講演、さらに12題の一般演題と3題のポスター発表が行われた。また、1階の展示会場では『新医療技術開発機構プレゼンス』と題し、日常生活指導用具、臨床補助用具、機能訓練用具、教育用具として構造医学関連の機器や治療器具、健康食品、書籍などが展示されたほか、会場内のモニターでは吉田会長による講演や治療器具を解説したビデオなどが上映され、多くの参加者からの関心を集めた。

開会后、まず加藤実行委員長があいさつで、「日本構造医学会の学術大会も第7回を迎え、演題の発表内容もますます充実してきています。

そして、この名古屋は学会長の吉田先生が学生時代を過ごされた地でもあり、学術大会を開催できることに感慨深い思いがします」「前回の釧路大会にならい、演者と聴者とが同じテーブルについてディスカッションを行える形式を採用し、みなが一つの輪（和）になって討論することを目的としました」「一人の問題は全体の問題であり、全体的な問題は一人ひとりの地道な研究や努力の上にあることとして捉え、構造医学に関わる全員が呼応しあう方向性もちながら、われわれの役割は何なのか、この学術大会を通じてその目的目標を明確にすることが大切だと思います」と述べた。

つづいて吉田会長があいさつし、「今回の学術大会においても多くの研究成果や経験談が発表されますが、これによって参加者の深層での励起を受け、それがさらに成果として一般市民に還元されることに学術大会としての意義があるのだと思います」「また、今回は西村和雄先生に教育という視点から“生きる力”についてお話していただきますが、学力低下の問題は、次の世代が前の世代を越えられないという問題としても捉えることができます。これは、われ



開会のあいさつをする吉田会長



大会実行委員長の加藤彰一氏

われも医療者として、次世代を担う意識を持つべきだということの示唆となるのではないかと思います」と述べた。

一般演題5題の発表後、ランチョン形式で行われた住岡氏による教育講演、吉田会長による基調講演に続いて、西村氏による教育講演が行われた。

西村氏は、今日の学校教育現場で子どもたちにもっともストレスを与えているものは内申書であるとし、1994年に文部省が“新しい学力”として意欲・関心・態度を点数化して評価対象にした時期から、生徒間暴力が倍増していることを指摘した。

また、日本における教育改革の流れの中で、79年に共通一次試験がスタートし、80年には“ゆとり教育”が導入されたことによって、できる生徒とできない生徒の二分化が急速に進んだことも学力低下の一因であると述べた。現在では、日本の教科書の厚さは韓国やシンガポールの半分、理数系の授業時間はアメリカの半分という事実から、少人数クラスの導入によってできない生徒を排除せず、さらに自学自習教科



メイン会場となったレセプションホール



生体膜について講演する住岡輝明氏

書の使用によって考える力の創造を図ることの必要性が強調された。

引き続きポスター発表の解説と一般演題7題



教育問題について講演する西村和雄氏



名古屋国際会議場



円卓形式により活発なディスカッションが行われた

の発表が行われ、吉田会長による各演題の総括で締めくくり、さらに同会議場7F展望レストラン「パステル」での懇親談話会へと場所を移して、学術大会のプログラムを終えた。

今回の学術大会では、ディスカッションを重視した進行だったこともあり、各演題発表後の質疑応答が活発に行われたことも印象的であった。実際、大会終了後には多くの参加者から質疑応答の内容充実が著しいとの声が聞かれ、盛会裡に行われた学術大会の開催となった。

なお、次回第8回学術大会は来年10月25日(土)、福岡市の福岡国際会議場で開催される予定(P.29を参照)。

第7回名古屋学術大会で発表された一般演題、ポスター発表は以下のとおり。

一般演題：▽腰椎椎間板ヘルニアの一考察(内藤昇)▽口腔外科処置と生理的局所冷却(井上孝典)▽不定愁訴にみる骨盤環の機能障害——構造医学とAKA(佐藤啓躬)▽個体進化から二足歩行まで——体幹吊性・置性型捻れがヒトに与えた生理的影響について

(山本真永)▽高齢者の大腿骨転子に対して股関節障害器具臼蓋大腿骨頭サポートを応用した保存療法の体験(河野拓)▽非重力性障害が発生するその要因の研究——非荷重がもたらす心臓・腎臓への影響を考える(根橋豊光)▽見えない医学Ⅱ——重力医学と気の医学(三島茂)▽安全な歯科治療をめざして(秋田豊治)▽筋肉の働き(伊木晴彦)▽再生不良性貧血の一例(篠原清幸：本誌26号にて掲載済)▽臨床からの考察(岡田智雄)▽大学病院の臨床現場から(今田暁子・野本則絵)

ポスター発表：▽移動肢から離れたヒトの上肢(加生源紀)▽大腿周径差(澤田義雄)▽療養の具体策とその根拠(新藤勝之)